海外における日本庭園

福　原　成　雄

はじめに

英国王立キュー植物園（以下「キューガーデン」）内の勅使門（西本願寺唐門の5分の4縮尺のレプリカ）は、明治43年（1910）ロンドンで開催された日英博覧会において、日本展示の一つである京都館の入口に設置された。そして博覧会終了後キューガーデンに寄贈されたもので、海外においては数少ない日本の伝統的建築物である。勅使門を中心とする約0.5haの敷地は、ジャパニーズゾーンとして、日本固有の植物が植栽され、英国はもとよりキューガーデンを訪れる世界の人々に広く親しまれ日英親善の舞台ともなってきた。しかし移築から83年の年月が経過し老朽化が著しく、1994年10月～1995年11月にかけて修復工事が行われた[1]。日本庭園築造は、勅使門の修復に伴い、世界的に評価の高い伝統文化である日本庭園を日英共同で整備し、日英親善と両国の文化交流を一層深める事を目的として計画された。筆者は日本庭園築造にどう係わったか、以下に調査、設計、施工監理の留意点を示し、整備、充実されたジャパニーズゾーンを紹介するとともに、海外における日本庭園築造の意義、維持管理について考察する。

1. 調査について

調査は、日本の伝統技法を活用して良好な緑化空間の創出をはかり、併せて植栽植物の育生管理に関する技術協力を行うために3回の現地調査を実施した[2]。外国における調査は、限られた時間で最適の情報を入手し、計画地の雰囲気を肌で感じ、現地担当者との交流を図りつつ、その国の国民性、造園事情、日本庭園に対する意識等を的確に摑むことである。

当初の調査、検討内容は下記の通りである。

(1)　ジャパニーズゾーンの現況と地形の調査
(2)　「キューガーデン」側の計画指針の調査
(3)　日本庭園の計画及び設計方針の検討
(4)　設計図書の作成
(5)　工事費の積算
(6)　合理的な工事計画の検討
(7)　その他日本庭園築造に関する必要な情報の収集

上記内容を下記の現地調査で明らかにした。

第一回現地調査の内容

(1)　計画の基本的事項について、協議し、基本計画図を作成する。
(2)　日本側で作成する基本設計及び実施設計のため、計画地の測量調査、現地調達する植物、石材について調査を行った。

第二回現地調査の内容

(1)　実施設計に向けて計画地の把握（地形、周辺状況、樹木内容、建築、構造物の状況、施設配置の検討）
(2)　実施設計に向けて、Kewとの庭園設計協議
(3)　現地調達材料の調査（景石の形態、入手について、樹木の生産状況）
(4)　英国で作庭されている日本庭園の状況調査

第三回現地調査

(1)　日英の工事区分による工事費の積算（英国での材料調達業者、施工業者の調査）

(2)　工事材料の確認と、英国側見積依頼と調達

(3)　「キューガーデン」側と上記打ち合わせ協議

1）計画地の現況

計画地は、キューガーデンの南部樹林地帯に属し、周辺は、平坦な地形の中にシーダ類やヨーロッパブナ、アカメガシワ等の年代を感じさせる大木が点在する雄大な景観を持つ草地である。利用者は、大木や草花の間を縫いながら自由に散策を楽しんでいる。

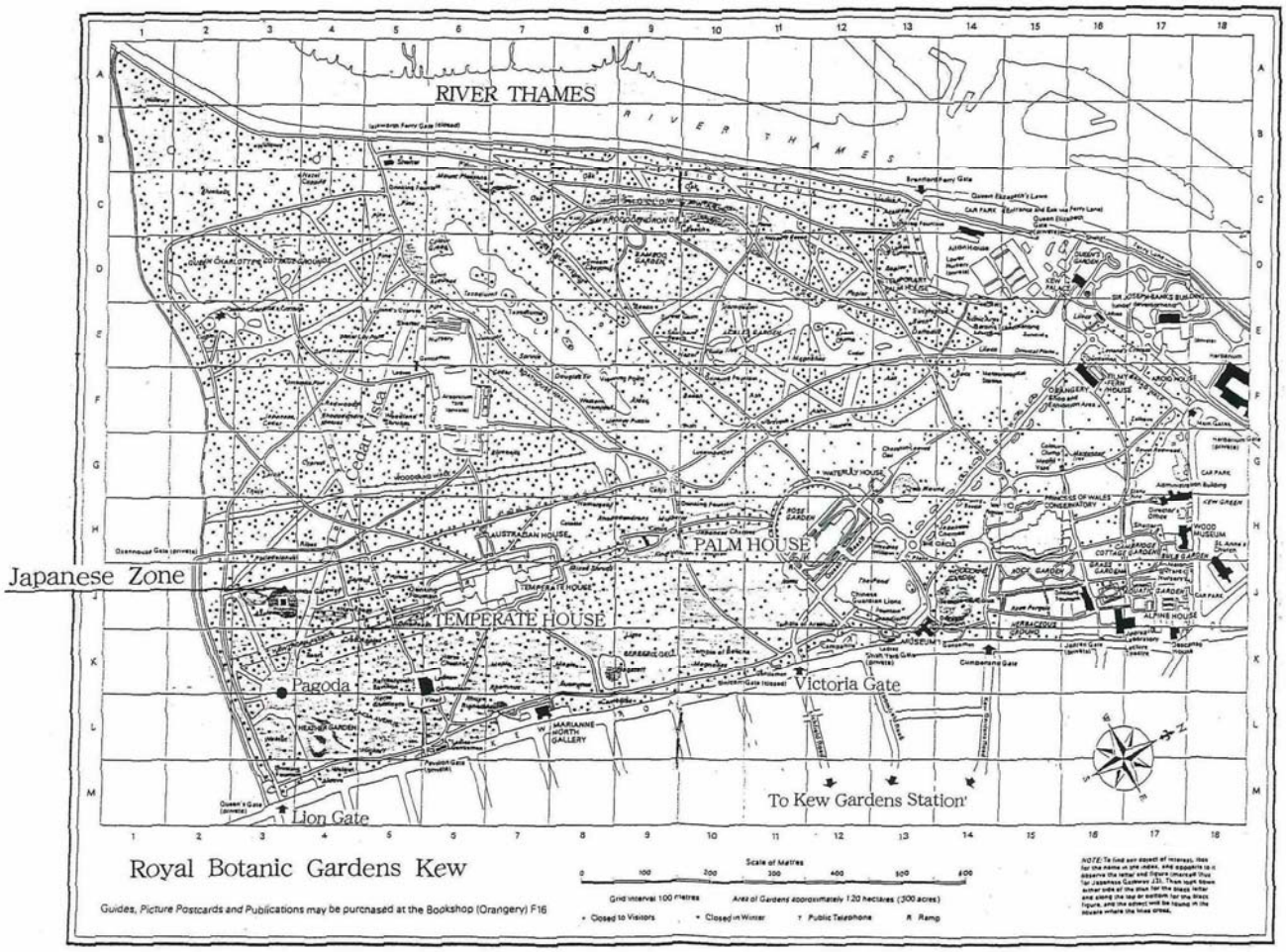
勅使門は小高い丘の上に大木に囲まれて建っている。この丘はキューガーデン設計当時（18 世紀）からのもので、プリンセス・オーガスターのためにウィリアム・チェンバース卿がデザインした場所である。すぐ南には、有名なパゴダ（18 世紀）があり、樹林の上にそびえている。パゴダから計画地の北側へ Cedar Vista（19 世紀）が通っており東側は Holly Walk（園路）に接している。このように樹木や地形、建造物等が、それぞれの時代背景と共に、主景となる力強さを備えており、相互に背景となりながら雄大な景観が形成されている。土壌は痩せており、砂地で PH は中性である。雨水は自然排水されている。気候は年間降雨量 600 ㎜、夏期最高気温 25℃、冬季最低気温－10℃である。

既存樹木の維持及び保存されている樹木は、日常の観察や、樹勢診断のため近づき易くされている。

その中で、新たに造られるジャパニーズゾーンは「囲われた庭園（Garden）」ではなく、周辺の景観と引き立て合うような「造園（Landscape）」が求められた。（図－1）（写真－1．2）

2）キューガーデン側の計画設計指針

1993 年 9 月、英国での討議事項より



図－1　位置図

写真－1　勅使門北側の現況

写真－2　勅使門南側の景

＊勅使門周辺の植栽について

キューガーデンを訪れた重要な方々の記念樹の中でも、ヒノキは、日本の企業と玉藻会から贈られ、1976年に日本の皇太子によって植えられたもので、それらを動かすことは適切ではない。

全体としての樹林園は、個々の植物収集園から成っており、特に最近集められ植えられている樹木は、研究目的から、人によって品種改良されていない自然な種に焦点が当てられている。

＊庭園計画について

日本庭園ではなくジャパニーズゾーンと考え、日本の精神及び植生を考えて計画してほしい。

訪れる日本人から観ておかしくないもの、当然日本の感じを反映させるべきである。

日本の植生を表すものにし、植栽の配置の際には、植物が自然な状態で自己表現する事が重要である。自然状態の表現は人工的な整枝や刈り込み等よりもふさわしいものである。この意味で、樹木にはあまり手を加えない方がよい。この地域の担当者は、南部樹林地城の熟練した園芸家たちによって管理されているが、スタッフ不足の状態なので、この地域を単独で担当できる者はいそうにない。また、剪定には特別な技術が必要なので無理だと思われる。故に比較的手入れをしなくて済むデザイン、自然樹形が望ましい。

勅使門が桃山時代の様式なので、庭園も桃山時代を考慮する。水はあまり使えないので枯山水はどうか。

植物も石もできるだけ日本の自然に近いものにする。植物的利用から景観構成する。灯篭、蹲踞は日本の伝統的なものなので置いても良い。基本的には日本側に任せるが、日本企業等が利用できる、茶、花、詩の発表会等の利用にも応えられる、野点や生け花を楽しめる日本的雰囲気が欲しい。日本の花博で作られたイギリス庭園は石組が日本的で、反対に英国ホーランド・パークの日本庭園は石組がイギリス的である。またリバプールの日本庭園は日本的である。今回のKewの場合はできるだけ日本的にして欲しい。

1995年10月Kewよりジャパニーズゾーンのデザインについて要望書がだされた

(1)　Kewは、様式と精神性を求められる日本庭園の維持管理のために技術を持つ職員を配置することはない。（将来も保証できない）

(2)　計画地には、大きな水景や流れ、水面は認められないが、もし求められれば、限定された（湧き出る泉や水の滴る岩）小規模の水景施設は受け入れることができる。

(3)　Kewは指導的な植物園であり、どこでも原生種の植物や、重要な日本の栽培種利用ができる。自然の植物形態は尊重されるべきであり、決まった形に刈り込むのは避けるべきである。

(4)　全ての材料は、日本的主題のものであり、もしくは日本とその文化に強い関連性をもつものであるべきである。

(5)　安全と安全への配慮は、造園のデザインの中に求め

られるべきである。園路は車椅子が通行できなければならない。デザインの中に階段が在れば、車椅子が通れる別のルートを備えて置くべきである。

(6) 造園のデザインは、植物材料だけに限定されるべきではない。我々は、その中にしっかりした造園構成と伝統的な構成要素が組み込まれたものを希望している。

(7) 寄贈者を顕彰する額や碑は、デザインに組み込まれるべきである。

(8) 計画の中に示された、既存木やほかの植物は、残されるべきである。その中の幾本は、樹木園の担当者の同意を得て移植する事ができる。

(9) 庭園と門についての説明板は必要である。造園デザインにふさわしい素材を用いたものが組み込まれるべきである。

3) 英国で作庭されている日本庭園

キューガーデン内ジャパニーズゾーンの設計に当たり、英国での日本庭園作庭事例調査を行った。英国には、公共、民間、大小合わせて現在約18カ所に日本庭園が造られている。

この中で、Kewとの打ち合わせ（1993年9月28日）で話題になったロンドン・ホーランドパークの日本庭園とリバプールの日本庭園について調査を行った。

(1) Holland Parkの日本庭園

1991年9月から、英国のジャパンソサエティ創立100周年を記念して「ジャパンフェスティバル1991」が開催された。日本庭園は、その一環としてロンドン・ホーランド・パーク内に「京都庭園」として築造された[4]。ホーランド・パークは、ロンドンから西へ5㎞離れたロンドン屈指の高級住宅街の中にあり、面積約20万㎡。近くにある有名なハイド・パークなどと違い、自然のままの姿が特色である。同公園は元々、ホーランド卿の邸宅跡で、19世紀末、ここに日本庭園が築かれていたと記録にある。1902年発行の園芸雑誌「ガードナーズ・クロニクル」は「清流には柳、竹やぶが影を落とし、飛び石、ショウブの花が美しい」と記述している。また、四つの池が小川で結ばれ、石灯篭まであったとの記述もあり、日本風の庭園が、当時のロンドンでも評価されていたことが伺える。こうした因縁から、ジャパン・ソサエティー百周年を契機に、同公園に和風庭園を再現しようとの機運が盛り上がり、京都側への協力要請となった。

「京都庭園」は、1988年に英国より京都商工会議所に建設要請があり、京都府、京都市、企業、各種団体からの助成、寄付金等約1億8500万円を総事業費として建設された。日本と英国の永遠のシンボルとして京都造園業会が結集して5500㎡の敷地に、現地で調達した景石約200トン、樹木3000株を使用して、深山幽谷を表した三段に流れ落ちる滝、広大な海の風景を表した池、野点広場、灯篭、蹲踞、ししおどし、等が配され、これらを園路、石橋が巡る池泉回遊式庭園である。1991年9月17日に日英両国の皇太子殿下の御臨席のもとオープニング・セレモニーが開催され、京都商工会議所よりロイヤルケンジントン・チェルシー区に寄贈された。

建設から4年経過した1995年10月2日に同庭園を調査のため訪れその状況を見学した。都心の中に在る公園として広く多くの市民に親しまれ利用されており、囲われた日本庭園内も多くの人々がベンチに腰掛け、また園内を散策し、滝を落ちる流れの音、池に遊ぶ小鳥や、リス等の小動物と触れあい景色を楽しんでいる。管理は芝生への立ち入りが禁止されており、かなり厳しい芝生管理がなされている。しかし庭園景のししおどし、かけひが破損し、樹木も整姿がされておらず日本庭園としては必ずしも十分に管理されているとはいえない状況であった。

写真－3　池の景

また、石組も大振りの景石を用いた滝に力が入りすぎ天端を平に据えた小振りの池護岸石組とのバランスがとれておらず（石組指導者が別人と思われる）、Kew が指摘するイギリス的な庭園（ロックガーデン）に近く、日本庭園としてよりも公園の園地として利用されていた。（写真－3）

(2)　Liverpool の日本庭園

1984 年 5 月から半年間開催されたイギリス・リバプール国際庭園博覧会'84 は、国際博覧会条約に基づく特別園芸博覧会として、英国で開かれた正式な国際博覧会としては初めてのものであった[5]。総面積約 25ha。

この博覧会は緑豊かな環境づくりを目的に、造園分野における専門的な研究の成果と文化遺産を展示するという主旨のもとに行われた。博覧会では都市緑化や園芸などに関するさまざまな団体による展示が行われ、さらに各種レクリエーション施設や多くのイベントが計画された。また博覧会会場は広大な埋め立て地で、博覧会終了後はレクリエーションエリアや、様々な開発用地として活用されるはずであった。日本庭園の出展については 1982 年に英国より日本政府に要請があり、1983 年建設省より(財)都市緑化基金に委嘱され、設計、施工を箱根植木株式会社が行った。庭園は周囲を生垣で囲まれた面積約 1400 ㎡の池泉回遊式庭園である。入口には一部瓦葺きの表門を設け、表門を入って正面には石庭が造られ御影石を加工して陶板をはめ込んだ庭園説明板、井筒、景石等が配置されている。これより延段を伝って、庭園の中心部池に接した銅板葺きの四阿に到る。四阿からはリバプールから 100 ㎞離れた Lake Vyrnwy より運んだ景石約 500 トンを使用して組んだ滝口、流れ、護岸、捨石、州浜、そして八つ橋等が観賞できる。

建設から 12 年が経過した 1995 年 10 月 4 日に調査のため同庭園を訪れその状況を見学した。現在の状況は、終了後レクリエーション施設、また、様々な開発用地として利用されるはずであったが財政上の問題で放置されたままで、訪れる人もなく管理もあまりされず、石塔、灯篭等が一部無くなっており、樹木も放置されたままの状況であった。（現地庭園管理者の話では、日本からの見学者が来られる時にのみ掃除、刈り込みをする程度であるとのこと、もっと多く来られると美しくなりますとのことであった。）庭園としては、地割、石組、各種庭園施設も巧みに配置、配石されているが、滝からは水も流れず、竹垣、木製施設の老朽化も著しく海外での庭園の維持、管理の難しさを考えさせられる事例である。（写真－4）

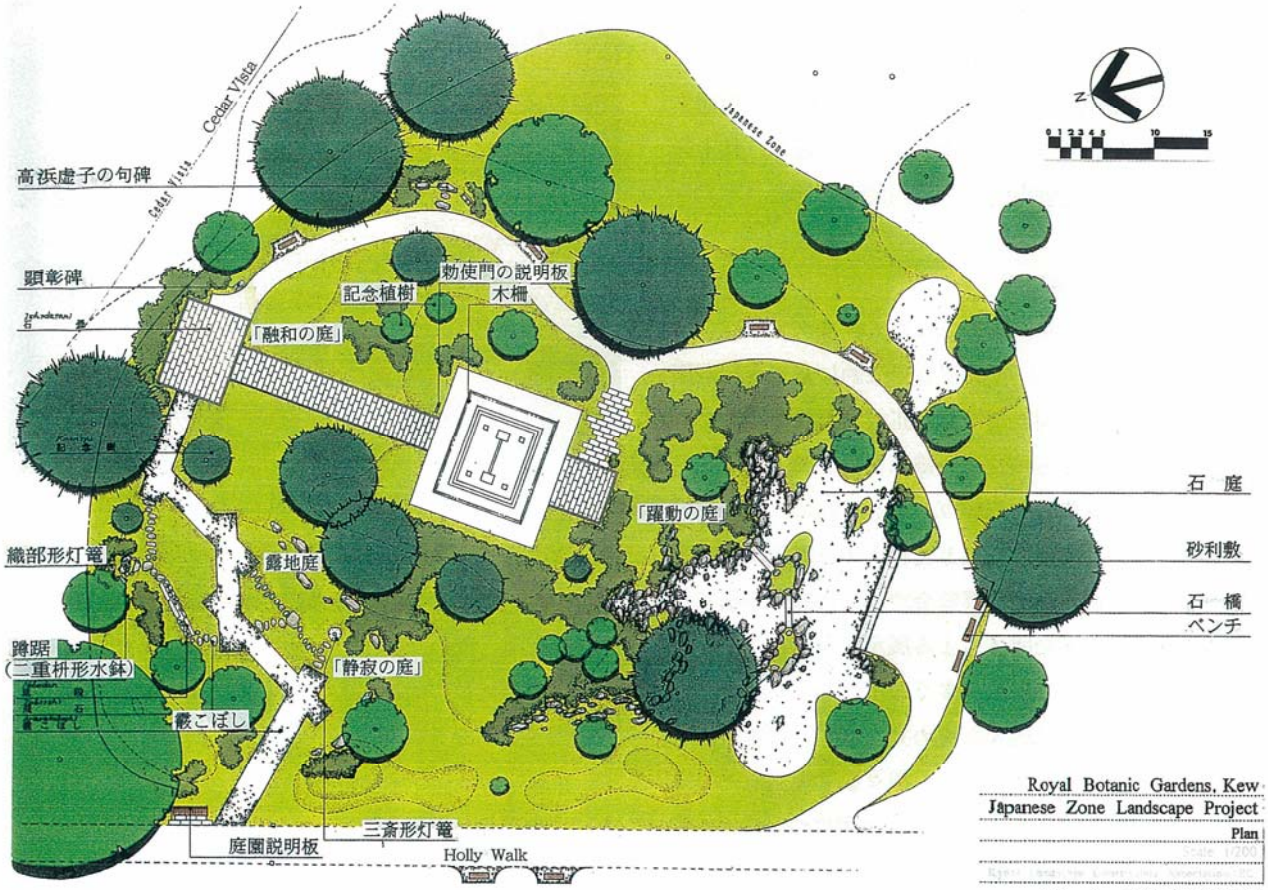
写真－4　池の景

4）現地調達材料の調査

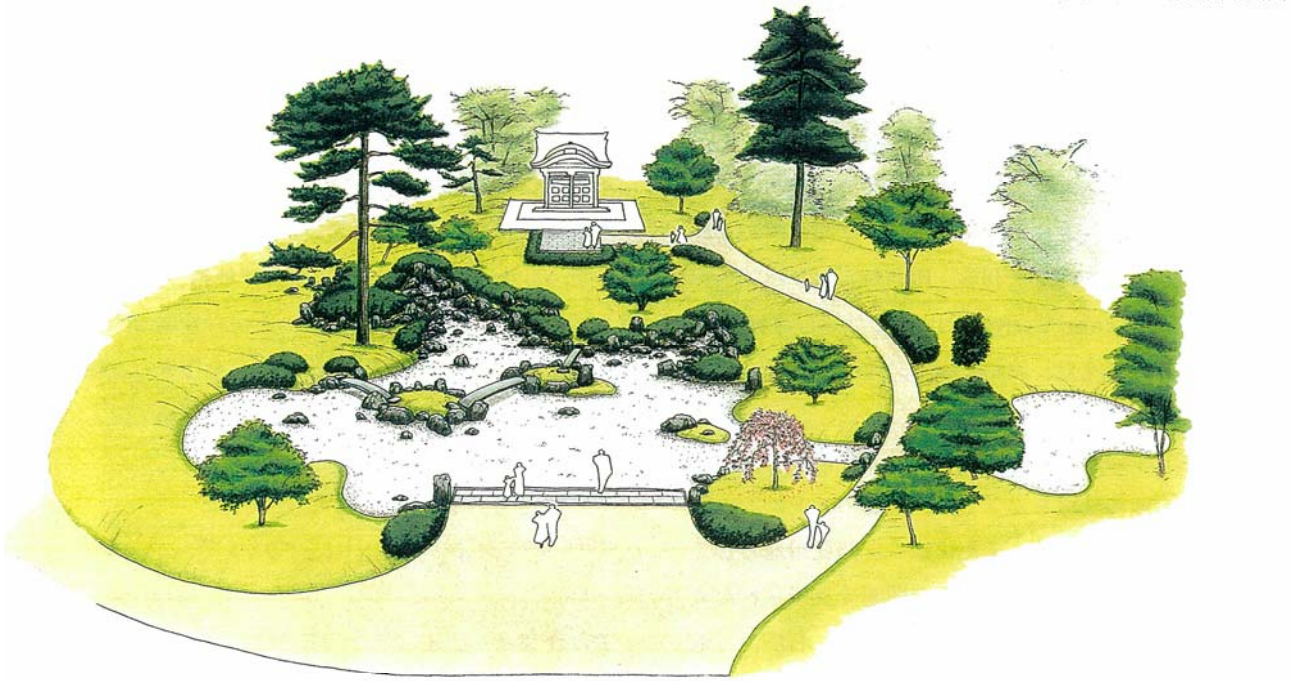
現地調達の石材、植物材料は、キューガーデンの紹介で、ロンドンの石材業者 CED（Civil Engineering Developments Ltd.）、にて石組用石材、玉石、砂利、加工石材等の調査を行い調達可能であると確認できた。さらに、リバプール日本庭園石材納入業者の Summerfield & Lang Ltd. の案内により Wales Lake Vyrnwy の石切場で石組用石材の調査をし、石質は脆いが使用出来ることが確認できた。しかし、石橋については加工技術、加工日数（フランスで加工）が不明確であることから日本で調達することにした。植物材料は、植物リストを作成し、樹種、規格、現場搬入時期等を何度も「キューガーデン」と協議して決定した。

2. 設計について

設計作業は、前述の調査に基づいて、修復された勅使門と一体となるジャパニーズゾーンにふさわしい日本庭園の基本方針を明確にするとともに、基本設計図を作成し、空間構成に無理がないか等を計画地で検討した。そ



図－2　全体計画平面図



図－3　スケッチ図

Royal Botanic Gardens Kew
Japanese Zone Landscape Project

図－4　立面図

して施設内容を確定し、英国での入手可能な材料、工法を決定して実施設計を作成する事であった。さらに、日英の工事区分と、工事費の積算（日英の材料業者、施工業者に、工事内容を説明し見積を依頼して作成）を行った。（図－2・3・4）

1）基本方針

勅使門は、16 世紀後半の桃山時代を代表する建造物である。ジャパニーズゾーンは、桃山文化を「動と静と和」で表象している。桃山時代の庭園の特色には、主に二つがあり、一つは城郭建築の力強さを取り入れ、雄大な石組を有する回遊式の林泉式庭園、書院前の枯山水庭園（この時代から水を象徴して敷かれた白砂に各種の波紋が表現される）である[3]。この中には、京都醍醐寺三宝院庭園や勅使門のある西本願寺虎渓の庭がある。また一方には、千利休が大成した茶道の下に、侘びの趣を表した茶庭がある。茶の庭は表門から茶室に至る園路を中心とした小さな庭で、自然の姿、山間の景、大自然の面影を小規模な露地の中に縮めて表したものである。さらに、神社仏閣に置かれた水鉢、灯篭が露地に使用されるようになる。以上の特色を踏まえ、虎渓の庭、桂離宮庭園（回遊式）、西芳寺庭園（石庭）を参考にして、勅使門を中心に躍動感と静寂感に溢れ、且つ多様・多彩な庭園空間とした。日本庭園は現代まで多くの様式を生み出している。そして何時の時代にも共通して求め続けているものは、自然風景をモチーフにした美しい理想の世界と、自然の再現、理想化である。

2）設計方針

(1)　勅使門の時代様式を表現した。

桃山時代の庭園様式を代表する雄大な石組の枯山水庭園と、露地庭を作っている。

(2)　ダイナミックスバランスによる調和を表現した。

勅使門の力強さと華やかさ及び周辺樹木の生き生きとした迫力と調和する躍動感を地形と石組と量感のある植栽等で表現した。

⑶　多彩・多様な空間の質を表現した。
力強さ、華やかさ、繊細さ、柔らかさといった多様な感覚を持った空間を表現した。
⑷　求心性と拡散性を持った空間を作っている。
⑸　周辺環境と調和した空間を作っている。

3）空間構成
勅使門を中心にして「動と静と和の空間構成」「回遊式」の配置構成を行った。
＊勅使門南側の傾斜地、平坦地を「動の空間」とした。「躍動の庭」
＊勅使門西側のHolly Walkより勅使門に至る空間を「静の空間」とした。「静寂の庭」
＊勅使門正面北側、及び周辺を動と静が出合う「和の空間」とした。「融和の庭」
4）施設内容
⑴「静寂の庭」は、勅使門西側、Holly Walkからの入口と、露地庭から成っている。入口は、勅使門が最も美しく眺められる位置に設け、ジャパニーズゾーンとして分かりやすい形態にした。この入口には、庭園全体の説明板（切石に陶板をはめ込んだ）を配置した。露地庭は静寂を表す庭で、山路を象徴した主園路（霰こぼし）をはずれたブランチの部分に、飛石、延段、蹲踞（水鉢は二重枡形）、灯篭（三斎型、織部型）を配置し、周辺の大らかな空間から露地の緻密な空間へ誘い、心の切り替えを図っている。また、傾斜地には、捨石を配石して山間の景を表した。
⑵「融和の庭」は、勅使門正面北側、及び周辺部の広庭から成り、露地庭から抜け出て、勅使門に相対する広がりを持った場所である。ここでは勅使門を仰ぎ見る石畳の広場と、勅使門に向かう石畳、そして勅使門を取り巻くように散策できる苑路（土舗装）からなっている。苑路、石畳に接して顕彰碑（自然石に銅板エッチングはめ込み）、勅使門説明板（切石に陶板はめ込み）、高浜虚子の句碑（根部川石に彫り込み移設）、句碑説明板（切石に既存銅板はめ込み）、木製ベンチ等を適所に配置した。
⑶「躍動の庭」は、勅使門南側の傾斜地、平坦地部分で石庭、観賞広場から成っている。石庭は桃山時代の石組の特色である雄大さを表した枯山水の庭とした。南面観賞広場（和風ベンチを配置）から仰ぎ見る勅使門の力強さとシンボル性を枯山水の石組によって強く表現し、石庭が相対時する事によって緊張感を生み、躍動感に溢れた庭とした。また、庭園の左は立石による雄大な石組で枯滝（蓮萊、雄滝）を表し、これから左右に石を組んで渓谷と渓流を作っている。対象的に右は、伏せ石を多用して落ち着いた枯滝（雌滝）を表した。池には、左右に亀島、鶴島の中島（神仙島）を配置している。神仙島を表現する庭園様式は、庭を永遠の表象として、その所有者に祝福を与える意味を持っている。松、鶴、亀は瑞祥として今日なお日本人の生活に生きている。また、中島に架かる石橋は、英国と日本の友好の架け橋を表した。
⑷　勅使門西側の傾斜地には、岩組を配し、勅使門から岩組にかけて低木を植栽して山地の様を表した。
⑸　勅使門を取り巻く苑路は、各庭園を結ぶとともに勅使門、樹木、石組等を観賞しながら散策を楽しむ段差のない庭園にふさわしい土舗装とした。
⑹　庭園植栽は、既存樹木を有効に庭園景観に取り込み、新植の樹木については、各々の庭園形態と調和のとれた日本的な樹種を配植した。植栽は、「遮り」「見え隠れ」等の日本庭園の技法を活用し、場所に応じ草花を多植して華やかな雰囲気になるよう演出した。

3. 施工監理について

施工監理は、設計意図を正確に施工業者に伝え、そして、庭園全体をまとめる意匠、施工方法等の技術的指導を行う事である。特に造成工事（地割り）、石組工事、植栽工事の施工監理を行った。
工事分担は、造成工事、園路工事は英国施工業者主体工事とし、石組工事、灯篭据え付け工、蹲踞工、石橋工等を日本施工業者主体工事とした。そして植栽工事は、キューガーデン主体工事とした。使用材料については日本で手配した材料（灯篭２基、水鉢１基、石橋３橋、庭園説明板、勅使門説明板、顕彰説明板）であった。英国で手配した材料は（石組石材、舗装石材（黒玉砂利、板

写真－5　「静寂の庭」入口の造成

写真－6　「躍動の庭」枯山水の造成

写真－7　滝石組

写真－8　露地の植栽

石、白砂)、各種加工石材、植栽樹木）であった。

1）造成工事

造成工事は、設計図に基づき工事現場に庭園全体の地割りを確定し、仕上げの石組、植栽工事の出来上がりを左右する重要な工事である。さらに勅使門、既存樹木、既存外周園路の仕上げ高さを変更せずに新設の園路、石庭の池、滝、築山の造成土を工事区域内で処理出来るように造成高を決定したが、現状芝生の搬出にともない盛土量が足りず現場にて地割りの再確認と、枯池、園路の勾配高の変更を行うなどの指示をした。(写真－5・6)

2）石組の施工監理

石組の施工監理では、石の選定、配置、据え付け指示が重要であり、選定から完了まで、一石一石指図して石の姿、表裏、高低を決めて石を据え付けた。使用石組石材は、ウェールズ産約350トンで、石材選定に3日、石材搬入に5日、石組に14日を要した。機械は、100トンクレーンを5日、20トンクレーンを14日使用した。人員構成は、日本人スタッフ4人（玉掛け、据え付け）英国人スタッフ2人（据え付け穴堀）であった。(写真－7)

3）植栽工事の施工監理

植栽工事の施工監理では、地形の整形時に、石組回り、飛石回り、石畳の広場、石畳、苑路（土舗装）との取り付き、地むくりの高さ、形態について細かい指示を行った。これにより日本庭園のきめの細かい表現を出すことが出来た。植栽の配植指示は、勅使門、既存樹木、各石組等と回遊園路からの景色によって、竹の棒に樹木名を取り付け、高中木の位置出しを行い、砂によって、低木、地被、草花の配植場所を明示し、樹木札をペグに取り付けて行った。工事は、キューガーデンスタッフ（職員、学生）によって、植栽地盤工（トップソイル工、地形の

整形仕上げ、コンポストの混入耕耘）から、植え付け準備（水に浸ける、配置）がされ、丁寧な植え付けが行われた。（写真－8）

4. 竣工式

竣工式は、1996年10月8日に日本から紀宮清子内親王殿下、伴建設事務次官、藤井駐連合王国日本大使、志村緑化機構理事長、加瀬推進委員会委員長、を始め約50名が出席し、英国からはアレキサンドラ王女殿下、リッチモンド市長、ハーバードKew Trustees委員長、プランスKew園長を始め在英日本人を含む約110名が出席して行われた。紀宮内親王殿下とアレキサンドラ王女殿下によってコブシの記念植樹がなされ、その後、出席者一同が和やかに庭園を鑑賞された。（写真－9～23）

5. 外国における日本庭園築造の意義

外国における日本庭園数は、平成8年に（社）日本庭園協会が調査した260カ所、そして、（社）日本庭園協会のメンバーが何らかの形で関わっている庭園として139をリストにあげている[6]。

外国における日本庭園築造の意義について、昭和59年に建設省都市局公園緑地課建設専門官であった服部明世（1984）は、「造園の国際交流一現状と展望」で「わが国の建設技術、伝統芸術でもある造園技術のきめの細かさ、優秀さが世界中で認められ、求められる時代である。」「建設時の協力、完成後の利用、維持管理を通して、姉妹都市提携の絆を太く強固なものとするのに、効果が高いものである。」と国際交流に果たす日本庭園築造の意義を述べている[7]。

佐藤昌（1986）は、「外国における日本庭園」で「諸外国においてどのようにして日本様式の庭園が造られて来たかを知ることは、日本文化の国際交流上並びに我が国の造園史の一端を知る上で、興味ありかつ重要なことであると思われる。」として諸外国で行われた万国博覧会等に我が国が出展した庭園、外国人が自らの庭に作ったものを考察している。そして、「博覧会における日本庭園の

写真－9 「静寂の庭」入口の景

写真－10 灯篭（三斎型）の景

写真－11 蹲踞の景

写真－12 「融和の庭」全景

写真－13 「躍動の庭」枯山水の景

写真－14 枯山水の景

写真－15 枯山水の景

写真－16 枯山水の景

写真－17 勅使門近景

写真－18 「躍動の庭」全景

写真－19 中島の景

写真－20 雄滝の景

写真－21　雌滝の景

写真－22 「躍動の庭」とパゴダの景

写真－23　勅使門西面傾斜地の景

写真－24　勅使門及びパゴダを望む

出展は、初め日本文化を代表するアクセサリーとして、次には、日本文化を代表する象徴として設けられたことが判り、……外国人が自園に作った日本庭園は、日本国内の優れた風景・庭園を憧憬し、自分の庭にこれを模倣した一種の異国趣味の顕示として行われてきたことを知るのである。」と外国で日本庭園が当初どのように受け入れられたかを述べ、さらに「近年我が国に旅行して日本庭園の実際に触れる人も多く、また日本庭園に関する専門的著書も多数発行され、日本庭園の理解は深まりつつある。また、外国人と日本人の哲学思想的背景或いは文化史的環境の差異を越えて、外国における日本庭園の築造熱は、友好都市等の日本庭園の寄贈等公私を問わず著しく高まっている。」「かくして日本庭園様式は、世界の造園界における確固たる独自の地位が認められるに至って高く評価されていることは、一つにはこれら外国における初期の日本庭園の築造の影響であると考えられ、これらの歴史的価値を認識する必要があると思うのである。」と歴史的価値の認識による築造の意義を述べている[8]。

清水正之（1997）は、「博覧会が公園緑地の形成並びに啓発に及ぼした影響に関する研究」で「1974 年のウィーンの国際園芸博に本格的な日本庭園が出展され、1979 年ボンの連邦庭園博、1983 年ミュンヘンの国際庭園博つづいて 1984 年のリバプールの国際庭園博に回遊式庭園が出展された。このようにヨーロッパにおける庭園博への日本庭園の出展を重ねるにつれ、その設計構想、造園工事の方法も確立され、その本質の解説も適切になり、日本の造園美ひいては文化が興味本位から理解を深めるようになっていると推測できる」と博覧会での日本庭園に対する認識とその役割と効果について述べている[9]。

6. 維持管理について

海外における日本庭園の維持管理の必要性について服部明世（1984）は、「国際親善のシンボルとして建設された日本庭園、公園が資金難や造園技術者の不在のため、荒れ果てたままで放置されたり、壊されてしまっている。」と述べその対策として三つの提案を行っている[7]。

①窓口の統一化について、外国から日本の造園技術者の

要請があった場合、日本国として責任を持って対応するためには、資金、技術者、アフターケア、対外交渉等、その都度最前を尽くす必要があり、要請を受けた者が、個人、法人、公共団体を問わず統一した窓口に登録する。
②造園国際人の養成について、国際的に活躍出来る作庭技術者の養成。
③資金の確保について、国際庭園博への日本庭園の出展にともなう資金、庭園完成後の維持管理に定期的な造園技術者の派遣が必要であり、維持管理に要する安定的資金の確保が必要である。

次に海外の日本庭園の保全、維持管理に積極的に取り組んでいる（財）都市緑化基金、（社）日本庭園協会、大津市の概要を紹介する。

（財）都市緑化基金（1988）は、「海外における日本庭園の保全に関する基本方針」で、海外諸国に建設された日本庭園は、貴重な施設として各国国民に大いに親しまれ、我が国への理解を深める上で多大な役割を果たしてきたが、この日本庭園を我が国固有の文化資産として更に世界の人々に伝えるという立場から、これら庭園の保全について奉仕的活動を実施することを保全事業の趣旨として、1988年に、イギリス・ドイツ・オーストリアを対象に、日本庭園の現状、管理体制の状況及び事業の受け入れの可能性について調査を行い、1989年には、イギリス・リバプール市日本庭園保全事業（庭園内の主景木について剪定・手入れ等の技術指導、竹垣の修復等の管理技術の指導及び維持管理作業、管理資材の提供及び器材の使用方法の指導）を行っている。1990年には、ドイツ・ボン市日本庭園保全事業（日本から搬入した建仁寺垣・鉄砲垣の資材の作成指導及び古材を利用した竹塀の企画制作指導、松を中心に剪定技術指導、飛石・石積等の修復）を行っている。1991年・1992年には、オーストリア・ウィーン市日本庭園改修保全事業（池、流れ、滝口等周辺の高木の剪定技術指導及び補植樹木の剪定及び調達準備、現況測量、改修計画の作成、各種協議、池・石組等の改修工事、生垣の新設、補植等の指導）を行っている。

1993年・1994年は、さらに海外における日本庭園の現況調査を実施している。

（社）日本庭園協会（1996年）は、1996年10月にアメリカ・オレゴン州ポートランドで開催された「国際日本庭園協会」（会長キャップ・サヘキ）主催の「日本庭園シンポジュウム」に、日本庭園の啓蒙、海外における日本庭園の維持管理についての指導、海外巡回指導の実務者チームの組織と派遣、海外より日本庭園作庭依頼の受け皿としての役割等、これらを通じて、国際親善を図るという長期的な展望に沿って活動することを目的に参加している。

大津市は、1990年にドイツ・ヴュルツブルグ市で開催された庭園博覧会場に、1989年の親善都市共同宣言10周年を記念して、両市の友好をより深めることを目的に池泉回遊式日本庭園を筆者が、設計・施工管理に従事して築造された。維持管理に関しては、1993年10月にヴュルツブルグ市より大津市に、二人の造園技術者を迎え現状の庭園管理の問題点、管理方法について意見交換をし、今後の維持管理について研修を行った。1994年11月・1995年5月には、現地日本庭園で松等の剪定管理業務指導を大津の造園技術者が行った。現在では、研修に来られたヴュルツブルグ市の二人の造園技術者が熱心に庭園を管理され、よく手入れがなされている。

キューガーデンの維持管理に関しては、勅使門の修復工事に伴う日本庭園築造により、勅使門の維持管理と併せて隔年に日本より建築、造園技術者の派遣と、キューガーデン技術者の交流を積極的に進め、お互いの技術交流の向上を図りながら行うものである。

7. おわりに

以上、キューガーデンにおける日本庭園築造の経緯と構築の概略、築造の意義、維持管理を紹介してきたが、気候風土、特に石組石材、植栽樹種等の造園材料の異なる地に、純日本庭園を創作する事はなかなか困難であった。

明治6年（1873）ウィーン博覧会で、初めて日本式庭園が作られて以来、多くの日本庭園が友好都市、各種博覧会等で築造されている。そして近年、益々築造熱は高まり作られる庭も完成度の高い庭園が観られる様になっ

ている。しかし、今後の維持管理と、外国の庭園文化にどの様な影響をもたらすのかという問題、さらに、今までに作られた日本建築、庭園施設が監理不足によって老朽化しつつある問題に対して、どの様な方法で援助できるのか、調査研究が急務である。そのためにもキューガーデン日本庭園築造は意義深く、今後の日英共同による維持管理は大切である。なお英国王立キュー植物園内日本庭園築造が両国の多くの関係者のご努力によって完成され、そのお手伝いが出来たこと、さらに環境計画学科学科長清水正之教授、坂本新太郎客員教授には、設計、施工監理中にも懇切なご指導と助言を賜った。記して心から感謝の意を表したい。

＊キューガーデン内日本庭園築造データー

業務名称：キューガーデン内日本庭園築造に係わる調査、設計委託
発注者　：(財) 都市緑化技術開発機構
受託者　：(社) 京都府造園建設業協会
吉田昌弘（(株) 空間創研）
武田　純（(有) ウッズプランニング）
福原成雄（大阪芸術大学環境計画学科）
設計協力：(株) 中根庭園研究所
木内さおり（大阪芸術大学環境計画学科）
監　理　：(財) 都市緑化技術開発機構
福原成雄（造成、石組、植栽）
武田　純（植栽）
施　工　：前田建設工業（株）、箱根植木（株）JV
設計期間：1995 年 8 月～1996 年 2 月
施工期間：1996 年 5 月～1996 年 9 月

参考文献

1) (財) 都市緑化技術開発機構（1994）：キューガーデン・ジャパニーズゾーン整備事業勅使門修復調査報告書
2) (財) 都市緑化技術開発機構（1996）：キューガーデン・ジャパニーズゾーン整備事業日本庭園築造調査報告書
3) 上原敬二（1931）：庭園の鑑賞と築造，pp76-86：金星堂
4) (社) 京都府造園建設業協会（1992）：ロンドン京都庭園　造園事業報告書
5) 木村英夫（1984）：'84 リバプール国際庭園博覧会と日本庭園：造園修景 20，pp7-10
6) 庭（1996）：リスト世界の中の日本の庭抄，pp133-136：(株) 建築資料研究者
7) 服部明世（1984）：造園の国際交流―現状と展望：公園緑地 Vol. 44, No. 6, pp6-9
8) 佐藤昌（1986）：外国における日本庭園：造園雑誌 49（3），167-188
9) 清水正之（1997）：博覧会が公園緑地の形成並びに啓発に及ぼした影響に関する研究, pp90-101